

メンバー名：大谷瑛史、小林史弥、吉田拓海

訪問国：イタリア

北イタリアを流れるバッキリオーネ川流域を調査した。流域の主要都市であるパドヴァ、ヴィチェンツァのほか、エステ、モンセリチェといった小さな都市、そしてエウガネイ丘陵地周辺にある古代ローマ遺跡の発掘現場なども訪問し、この地域一帯の理解を深めた。

パドヴァでは、**広場の使い方、街路の空間の違いなど公共空間が日本とは全然違う使われ方で驚いた**。とくに、広場に面して立地するカフェテラスは大変気持ちよく、日本にもそういう空間が増えて欲しいと思った。たとえば、広島の川沿いにあるカフェテラスのように、車道と切り離された気持ちよい空間がある。そういう場所がもっと町中にもあれば良いと思った。そして、ちょうど調査した期間が夏ということもあり、**全体的に開放的な使われ方だったのが印象的**である。そのなかでも8月15日のイベントが印象に残っている。聖母昇天祭というキリスト教の祝祭の1つだが、この日はイタリア全体が休日になる。パドヴァでは、町の中にある広場で盛大なイベントが繰り広げられ、その最後には花火が打ち上げられた。広場に面して店舗、オフィス、住宅がある。その広場で音楽をがんがん鳴らしたコンサートが行われ、何十発もの花火が打ち上げられる様は日本では考えられないと思った。**都市とイベントとがこれだけ密接なのは、イタリアの特徴なのかもしれない**。パドヴァではこうした日本と大きく違う、**多様な公共空間のあり方を学んだ**ように思う。



パドヴァの中心広場



ポルティコが並ぶパドヴァの街路



広場でのイベント



8月15日に打ちあがる花火

ヴィチェンツァはアンドレア・パラディオというルネサンスの建築家が有名である。その建築群は世界遺産にも登録され、国内外から訪問者が多い。そのため、アンドレア・パラディオの作品である建築単体ばかりが注目され、都市全体を研究するというのはなかなかないように思う。そこで我々はヴィチェンツァの中心部全体を把握しようと思った。

1580年代の鳥瞰図を用いて、今とその時代がどう違うのか比較考察しながらこの都市を調査した。教会や修道院のような宗教施設や、貴族の邸宅であるパラッツォが鳥瞰図に描かれており、現在もその位置にあることが確認できた。ここで驚いたのは、鳥瞰図に描かれている水車が現在も同じ位置に残っていることである。おそらく、木造から金属の水車に変わってはいると思うが、同じ位置で産業が続いていたことがわかる。400年以上も都市の記憶が受け継がれており、歴史的な町がこうしてできあがっているのかと目の当たりにした。

そこで思い出したのが、古代ローマ遺跡である。バジリカという有名な建物がヴィチェンツァの中央にあるが、この地下には古代ローマ遺跡が眠っているのである。それも、フォロという当時の中心あった場所が遺跡として存在していたことがわかっており、**古代ローマ時代から今日に至るまで、都市の中心があまり変わっていないということも驚いた。**

またヴィチェンツァでは、貴族の邸宅であるパラッツォを改装した宿に宿泊した。ここでは、自炊もできたことから、肉屋、生ハム屋、パン屋、チーズ屋など地元の店舗で買い出しをして、地元の食材を使って料理をした。現在の肉屋は45年前にオープンしたが、そのオーナーになる以前からここには肉屋があったという。生ハム屋には、1923年の写真があり、100年近い老舗だということもわかった。こうした地元の人を使う店舗を利用することで、また、都市のなかで実際に生活してみることで、普通の観光では感じることでできない経験ができた。



アンドレア・パラディオ
改修のバジリカ



水車跡



地元の店舗で購入した夕食

エウガネイ丘陵地の古代遺跡の水浴施設も訪問した。パドヴァの近郊に位置するモンテグロット・テルメには、古代ローマ時代の別荘があったとされ、その別荘には水浴施設（テルメ）が併設されていた。その遺跡が一部発掘されている。熱いお湯の浴槽、ぬるま湯、冷たい水の浴槽、といくつかの水温に分けて異なる空間を使っていた。水車を用いたポンプ式の排水システムもあったという。また、上側に綺麗な水が通る水路、下側に汚い水が通る水路となるような配管設備もあり、二層式の構造になっていた。

そしてこのテルメには、劇場も併設されていた。ローマ人が**楽しむ空間をつくる**のが非常にうまい人種であることがわかる。体育館もあり、体を鍛えることも流行っていたことがうかがえる。こうした背景には、ローマ人は時間があったということも言えるだろう。パドヴァは高密な都市だが、そこから離れた田園は全く別な世界であった。別荘、水浴施設、劇場、体育館と広大な空間で余暇を楽しむ当時の様子が浮かび上がる。そこは、**人と人とが交流する場所**としても重要だったという。

劇場の座席は100～150席くらいとされており、現在でもその姿を見ることができる。発掘調査からバックステージが3箇所あり、木造だったことや屋根もあったことなどが明らかにされている。こうした劇場の在り方はほかのテルメでも見ることができ、典型的な例だという。

現在、モンテグロット・テルメには、現代的なホテルが建っており、スパのメッカとなっている。古代ローマ時代の水浴施設が眠っている上には、現代のプールや温泉があり、記憶が継承されていることがわかる。**こうした場の継続がイタリアの特徴の1つ**と言える。

エウガネイ丘陵地では、モンテグロット・テルメのほかに舟運で栄えたバッタリア・テルメや要塞のあるエステやモンセリチェでも調査を行った。エステとモンセリチェでは、地元の図書館を訪れて文献調査を行った。あまり研究されていないことから、実測しながら都市空間を考察することにした。

以上、一連の研究成果を卒業論文としてまとめ、2020年3月に日本建築学会中国支部で発表する予定である。

最後に、**本助成金をもとにさまざまな地域を訪れ経験できたことが、これからの都市を考えるうえで大きなヒントとなった**。後輩にもぜひ進めたいと思う。この度は貴重な機会をいただき、感謝申し上げます。



テルメに付属する劇場の遺跡

エステの広場

モンセリチェの要塞